

から2小節間の順に8度（オクターヴ）、6度、4度の音程動機。全楽章へ派生する動機とは、冒頭から2小節間のチェロが四六の短三和音で下降していくのにあわせて、クラリネットのソロが上昇する旋律線を描き、相互に扇形にひらいていく音の動きである。

第一主題は冒頭にいきなりクラリネットのソロによって現れる。チェロの音の推移との関係は、前述のとおり。ソロ・クラリネットの上昇する動きは、順に半音–短三度–半音／短三度–半音–全音–半音–増二度–半音–半音と調性が定まらない動きである。半音階進行が想定されるのに全音階進行であつたりする不思議は第三章に顕著である。

順次、木管楽器の声部が重ねられていくと、第一主題はヴァイオリンとヴィオラに引き継がれる。同時に、チェロとバスは一層明確な下降する半音階進行を弾く。木管群とヴァイオリン、ヴィオラに8度音形が現れた後に、◁dfa〉と動く6度と4度の音程を持つ音形が5回連続して高揚すると、循環主題I（原形）が4／4の小節に拍をずらせて3拍子で現れる。この旋律は、形を変えて第二章の冒頭にいきなり提示されるので、少し長いが引用をしておく。固定ド唱法で記せば、◁ララララ・ソラララ／ララ♭シド・♭レレレレ／ド♭レレレ・オレレ♭ファ／ソ〉である。(譜例3)第二章の十六分音符で第一ヴァイオリンが奏する旋律線は、◁ラ♯ソラシドレミレ〉であり、(譜面8の1小節目)これは循環主題（I）（原形）の音の変わり目だけを追いかけることで導き出される。

この旋律に対して、短三和音とピッコロの8度で跳躍する三つの音と、4度のバス、チューバなどが並行して奏される。6小節の後にティンパニを伴って、循環主題Iの真の姿が現れる。◁ミニミレミ〜〉という動機である。(譜例2)この主題こそが全楽章に必ず現れる統一主題である。

では、この主題が何を意味するかを解き明かしてみよう。循環主題I（真の）は、チェロとバスの完全4度を下降する半音階進行と、ティンパニの附点八分音符と十六分音符の詰まったリズムによって修飾されている。低弦の完全4度を下降する半音階進行は、最後に下降が始まった音の8度下の音に降りて、再び始まりの音に戻ることを繰り返すため、これが「ラメント・バス (Lament Bass)」であることが明確になる。ラメント・バスとは、嘆き、哀悼などを表現するバスの動きであり、ヨーロッパの17世紀に起源を持つ楽式である。

次にティンパニの附点八分音符と十六分音符のリズム動機は、この交響曲が作曲された5年後に芥川が作曲したオペラ「暗い鏡」(1960)の冒頭で、傷ついた青年が暗い街灯の下を歩く場面に奏されて、このオペラの中で象徴的な動機として使われることになる。従って、循環主題Iの意図するところは“悲歌”であると推測する。

因みに、この循環主題Iと“傷ついた歩みのリズム”の組合せは、芥川が1957年に作曲した「子供のための交響曲“双子の星”」の第13曲の最後にも現れる。彗星にだまされた双子の星は海の底に沈んでしまう。通りかかった大きなクジラに助けられて海蛇の王様の前に二人が導かれた時に、この組合せが奏される。傷ついた双子の星の“悲歌”である。

ティンパニの“傷ついた歩みのリズム”が止むと、第二部に入る。**【第二部】**練習番号23番まで第二部は三部形式で構成されている。(即ち、第一章は入れ子になっている。)第二主題に挟まれて、第二主題から展開した循環主題IIが提示される。

循環主題Iのリズムに基づくタタータ・タタという動機を伴奏にして、フルートとオーボエのユニゾンによって第二主題が現れる。◁ミニ／♭ミ, ♯ファ♯ファ／♭ラ〉。(譜例4)同音は8度で跳躍する動きが“傷ついた歩みのリズム”から派生した附点八分音符と十六分音符で奏されて、◁♭ミと♭ラ〉は二分音符の旋律として歌われる。フレーズの4小節目には同音を2オクターヴ跳躍する三つの音を奏して8度音程を強調する。この2オクターヴ跳躍する三つの音は、この後第二部 Più mosso の展開部の導入動機としてヴィオラに現れる。

第二主題はヴァイオリンと木管によって繰り返されるが、チェロやバスの動きが循環主題I（原型）に付随する動きの変容であり、そ



れによって第二主題も悲しみの歌であることがわかる。第二主題の譜割は、後に芥川が作曲する映画音楽「八甲田山」(1977)の主題と同じであり、雪中行軍して遭難する徳島隊の象徴として現れる。

第二主題は三度繰り返された後に、◁♭ラソ♭ラ, ラ♯ソラ〉と続いて、(譜例5)切迫した凹型の刺繍音形の短い動機で頂点に達して終わる。余韻が残るホルンに6度・4度の動きが出た後に、楽章冒頭のクラリネットソロが4小節間回想されてフレーズの最後でさらに6度・4度の動きを二度奏する。

この様に繰返された6度・4度の動機は、最後に小太鼓◁Tamburo militare〉を伴ってトランペットとトロンボーンによって提示される。この動機が“悲歌”である循環動機Iを導き出した動機であることを思い出して欲しい。

6度・4度の動機に導かれて、弦楽器が短三度和音をフォルテッシモ (ff) のトレモロで強烈に刻む。そして、più mossoで第二部の展開部に入る。ショスタコーヴィッチを連想させるが、しかし、音楽の内容そのものは関連がない。

第二部の第二主題から派生した“2オクターヴ跳躍する三つの同音(ファ)”のヴィオラに導かれて、八分音符ふたつと四分音符の組合せで、◁♭ミ♭レ (ヴィオラで) ♭ミ (ヴァイオリンで) 〉と全音で動く凹型の音形が現れる。(譜例6)次に短三度ずつ二回上昇して、今度は半音階の凹型刺繍音形◁♭ソファ♭ソ〉が奏される。(譜例6)さらに全音で動く凹型の音形はヴァイオリン群に交互に現れて、小太鼓を伴った木管とトランペット及びシロフォンに引き継がれる。(最もショスタコーヴィッチの音を連想させる部分である。)最後は半音階の凹型刺繍音形が二度念押しされて、この動機が第二主題最後の切迫した凹型刺繍音形から展開した動機であることに気が付く。これが、循環主題IIの提示である。

続いて第一ヴァイオリンとクラリネット群が◁♭ラドファ♭ラドファ〉(この音形は第三章と終楽章のコーダの重要な部分に現れる)と上昇すると、(譜例7)これに導かれる様に木管楽器、トランペット、シロフォン、第一ヴァイオリンが◁シ♭シラ♭ラ〉の密集した不協和音で11個の音を強く打ち付ける。

11個の音を強く打ち付ける音楽といえば、誰もがストラヴィンスキーの「春の祭典」(1913)の第二部二曲目「若い娘たちの神秘的集い (MYSTIC CIRCLES OF THE YOUNG GIRLS)」を思い浮かべるであろう。さらに、芥川の交響曲第一章第二部の展開部の初めの◁♭ミ♭レ♭ミ〉と動く凹型の動機 (譜例6)を短三度あげた音形は、◁♯ファミ♯ファ〉となり、「若い乙女たちの神秘的集い」の冒頭に繰り返されるフレーズの始まりと一致する。

「若い乙女たち・・・」とは、太陽神の「生贄」にされるべく集められた乙女たちである。音楽に文学的な説明を持ちこみたくはないが、Tamburo militare を伴った「若い乙女たち・・・」の動機の引用と、11個の音の連打の意味は「犠牲」という言葉を、嫌でも連想させる。

「春の祭典」では11個の音の強打の後に「選ばれた娘たちへの賛美 (GLORIFICATION OF THE CHOSEN ONE)」という歓喜の踊りが開始されるが、芥川の交響曲では冒頭の第一主題が回顧される。第二主題と循環主題Iの組合せによる経過部分の後に第二主題が再現されて盛り上がり、第二部が終わる。

【第三部】最終楽章まで

音楽はそのまま全楽器が奏する第一主題に突入する。さらに循環主題I（原型）と循環主題I（真）が奏されて、最後は◁de (レミ) 〉の音形 (譜例2)を繰り返しながら静かに終わる。

思い返せば冒頭のクラリネットソロのテーマが多様な動機の萌芽を含んだ象徴的なものであることが理解される。第一章は、「犠牲」を追悼する「悲歌」である。

第二章

この楽章は、自由なロンド形式をとる。そして、第一章の動機に強く支配されている。従って、第一章を交響曲の提示部とすれば、第二章は展開部とも位置付けられる。



この楽章は、芥川の音遊びのテクニックが満載の楽章である。循環主題Iの旋律ラインとリズムの変容、循環主題IIと半音階の下降進行の組合せ、循環主題Iのリズムと循環主題IIの音程の組合せなどのほか、ひとつの音を中心に狭い音域の中で行きつ戻りつする音の動きは芥川音楽のひとつの特色である。

冒頭からヴァイオリンが主導的に動く。(譜例8)最初の小節は◁ラ♯ソラシドレミレ〉と循環主題I（原形）の旋律ラインを弾くと同時に、最初の三つの音で刺繍音形である循環主題IIを示す。2小節目は◁ミレミ〜レミレ〉と第一章の終止形を弾く。3小節目は上昇する半音階進行。4小節目は、実はバッハのマタイ受難曲の第63曲 (BWV) コラールの旋律を連想させる f-moll の音階を◁ミ (レドシ) ・ラソファミ／レ (移動ド唱法) 〉と下降する音形は、第一章練習番号12の前で4度の下音から跳躍して◁レミファソラ〉と上昇する音形と符合する。続く6小節間では循環主題IIから展開した凹型の刺繍音形を含む木管の動機に組合せて、半音ずつ下降する四つの音がヴァイオリンに現れる。

11小節目は、冒頭開始の旋律に戻るが、◁ラ♯ソラシ・ドシドレ〉と循環主題IIを強調する。

以降、このように小節ごとに第一章の様々な動機を展開して進む。練習番号4の前では、循環主題Iのリズム動機が十六分音符で提示される。その2小節後に、附点八分音符と十六分音符で、その後は十六分音符でフルートとヴァイオリンが刻む、A-Durのおどけて暖かな感じのする◁ファ〜ミ, ファミファラ〉という旋律でさえ、(譜例9)第一章終了部分の◁de (レミ) 〉という動機を3度上げた展開である。

やがて弦楽器から、次に木管群が徐々に、金管群も徐々に加わり、さらにシンバル、シロフォン、ティンパニが加わる強烈なオスティナートが始まる。終始十六分音符で刻み、四小節を単位としてアクセントの位置が小節単位に変化しながら音域が上昇するため、行き先が見えない不安にかられる。この半音階の凹型刺繍音形が連続するオスティナートは11連打ではなく5つの短縮された連打で終息する。半音で変化するこの動機が、循環主題IとIIから導き出されていることは、すぐに理解されるであろう。

第二章終了前に、全管弦楽によって循環主題Iのリズム動機が十六分音符で激しく奏されるが、第一ヴァイオリンのみが、聴こえることがないであろう◁de (レミ) 〉を弾く。最後は、全楽章を覆う半音階進行を否定するかのように五つの音が全音階で刻まれる。

第二章は、第一章を徹底的に展開してみせた楽章である。

第三章

全楽章のうち唯一標題があり、Chorale（コラール）と題された、三部形式の楽章である。

第一部は弦楽器の複調（違う調性が同時に奏される）による半音階的進行で始まる。複調は第一章の冒頭と同じく、相互に扇形に開いて進行する。三つのパターンが三回繰返されて徐々に音量を増加させていく。パターンが変わるたびに、打楽器が循環主題Iのリズム動機を打つ。やがて第一章の11連打の前で提示された◁♭ラドファ〉の動機 (譜例7)が第一ヴァイオリンに出るとティンパニに“傷ついた歩みのリズム”が現れる。

中間部 (Pocissimo più mosso) に入ると、循環主題Iからと派生した旋律がホルンに現れ、4度音程で跳躍した後下降する動機とがさまざまな楽器に引き継がれる。やがて循環主題I（真）が金管に出た後、弦楽器が駒の近くで擦るトレモロで半音階上昇すると、管楽器群はポツポツと音を打ちながら静かに緊張して半音階下降して中間部を終える。

第二部は、第一部を再現する。終盤、大太鼓の循環主題Iのリズム動機と、ティンパニの“傷ついた歩みのリズム”が強く打ち、悲しみを刻印する。大太鼓が止むと、循環主題I（原型）の最高音ラの音が全楽器によるフォルテ三つのユニゾンで鳴って、崩れ落ちて終わる。



第四章

ロンド形式。弦楽器とハーブが八分音符で短3度のリズムを刻む上に、第一ヴァイオリンが6小節の主題を提示する。◁ラ〜〜♯ソラ・♭シ〜〜ラ♯ソ／ラ〜♯ソラ・♭シ〜ラ♯ソ・ラミ〜〜〉という主題 (譜例10)は、♯ソを中心に回転する音形が典型的な芥川のモティーフである。この主題は、私にはチャイコフスキー交響曲第五番冒頭のクラリネットによる主題を連想させるが、後半部分2小節目は芥川の「交響第三章」第一章の第二主題と同じ動機のリズムである。しかし、ここでは循環主題IIの展開であり、半音階の凹型刺繍音形こそがこの楽章の最も重要な主題である。

他の楽章と同じく、循環主題I、第一章第二主題、第一章及び第三章の半音階進行などから展開した動機が、おもちゃ箱をひっくり返したように、時には金管楽器が強奏し吠える。

Prestoで始まるコーダはこの楽章の主題が次々に現れる。特に、打楽器群が本格的に加わる練習番号38のクラリネット群に例の11連打の前で提示された◁♭ラドファ〉の動機 (譜例7)が奏されると、切迫する楽想の中に半音階の凹型刺繍音形がヴァイオリンと木管により連続して出る。二回目のストレッチのときには、上昇する半音階の凹型刺繍音形が、半音階で下降する低音楽器群と拮抗する。

最後は、十六分音符の半音階で激しく扇形に広がる全奏のなかで、第二ヴァイオリンがひとりて抵抗するように刺繍音形を構成する半音階である◁♯レミ〉の不協和音を激しく弾いて終わる。

この交響曲は、第一章が提示部、第二と第三章は主題の展開、終楽章は第一章第二部の再現部と捉える事ができて、全体がソナタ形式的な構造を持つとも言える。

そして、凹型刺繍音形の展開（ことに終楽章の終了部分）、主題の拡張と短縮、扇形対向の音階進行への固執、第一章第二部の2オクターヴ跳躍する三つの音など、ブラームスの交響曲第二番と共通する作曲技法が含まれていることは興味深い。

初演（三楽章版） 1954年（昭和29年）1月26日 日比谷公会堂 三人の会第1回演奏会 指揮：芥川也寸志 演奏：東京交響楽団（改定版） 1955年（昭和30年）12月8日 日比谷公会堂 東京交響楽団第74回定期演奏会 指揮：上田仁 演奏：東京交響楽団 使用楽譜 レンタル：全音楽譜出版社（スコアが、全音楽譜出版社から販売されている） 編成 pic, 2fl,2ob,c-ing,2cl,b-cl,2fg,c-fg,6hr,3tp,3tb,tub,tim,xyl ophone,tamtam,tamburo militare con corda,piatti,gran cassa, 弦楽五部



三人の会」第2回演奏会 1955年6月23日 日比谷公会堂 芥川は自作「ディベルティメント」を指揮、演奏は東京交響楽団。撮影/小原敬司・提供/昭和音楽大学